

氏 名	譚 林宣
学 位 の 種 類	博士（造形）
学 位 記 番 号	博第 44 号
学 位 授 与 日	2024 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論 文 題 目	参加型地域広報による参加者のシビックプライドを醸成する可能性 小林市における地域の魅力を発見する共同創造
審 査 委 員	主査 武蔵野美術大学 教授 齋藤 啓子 副査 武蔵野美術大学 教授 若杉 浩一 副査 武蔵野美術大学 教授 三代 純平 副査 武蔵野美術大学 教授 北崎 允子

内 容 の 要 旨

2009 年（平成 21 年）以降、日本政府は「地域主権改革」を推進し、地方の人口減少や過疎化への懸念を背景に、「シティプロモーション」や「シティセールス」など新しい自治体行政の広報戦略の重要性が高まっている。行政広報には「行政サービス広報」「政策広報」「地域広報」の役割があるとされており、「シティプロモーション」や「シティセールス」において、「地域広報」は市民のシビックプライドを醸成する手段として認識されている。一方、1970 年代以降に「市民参加」という市民が直接的に行政の政策過程に参加する活動や、「市民協働」という市民と行政が対等に行政施策に関与する活動が、地域課題に取り組む民主的な方策として浮上してきた。こうしたことから、近年では、市民が制作過程に参加する「参加型地域広報」が注目されている。

本研究は、「参加型地域広報」における市民のシビックプライドの醸成プロセスに着目し、これを明らかにすることを目的とした。参加者の醸成プロセスは、その活動への参加過程と密接に関連していると思われる。しかし、従来の行政広報に関する先行研究では、制作関係者やデザイナーの視点からの研究は行われておらず、参加型地域広報の具体的な実施方法や、実際の参加者の経験に基づく研究はなかった。

このため、2014 年から 2022 年にかけて宮崎県小林市で長期にわたり運営されている参加型地域広報「西諸弁標準語化計画」を主要な事例として取り上げた。そしてこのプロジェクトの参加者のシビックプライドが醸成するプロセスを、質的研究法 M-GTA を採用して分析した。その結果、プロジェクトの中心メンバーは子育て世代であり、U ターン経験者が多いことがわかった。彼らは地域固有の文化や方言などの地域の魅力を再発見し、

方言をプロジェクトに取り入れて広範な支持を集めていた。また、これに対する外部からの肯定的な評価がメンバーの自己肯定感を高めたこと、地域活動の持続を可能にしたことが明らかになった。

さらに、「西諸弁標準語化計画」のメンバーのシビックプライド醸成プロセス分析結果を基に、より詳細なシビックプライド向上のプロセスを明らかにすることを目的に、「こばブットラボ」という新たな参加型地域広報の社会実験を小林市内で企画・開催した。参加対象者は高校生と社会人とした。この活動についても質的研究 M-GTA を用いて分析を行った。その結果、メンバーからの示唆により地域の魅力の多様性を発見、メンバーとの葛藤による地域理解不足の認識、メンバーからの評価による地域への帰属意識の芽生えなどを体験したことがわかった。さらに、この実験の特色である表現の共同制作をとおして、表現することによって地域の解釈を進化させたこと、意欲的に表現行為を持続する行動が現れたことが明らかになった。こうして共同創造の場の重要性も認識することができた。

最後に、「西諸弁標準語化計画」と「こばブットラボ」の参加者のシビックプライド醸成プロセスを比較し、総合的な考察を行った。比較して明らかになったのは以下のとおりである。

「西諸弁標準語化計画」の参加者は地域住民からの評価を通じて自己肯定感を、「こばブットラボ」の参加者はメンバーからの評価を通じて地域への帰属意識が芽生えを得ており、外部評価と内部評価それぞれの肯定的な評価が重要な役割を果たしていることがわかった。

「西諸弁標準語化計画」では長期的で継続的な活動を、「こばブットラボ」では表現方法を活用して地域の魅力を解釈し続けた。それぞれの参加者は地域への「行動変化」を示していたことがわかった。二つの活動を比較し、行動変化と活動の持続性に関係があることが明らかになった。

情報を共有し合う場、共感を確認し合う場、失敗の経験や葛藤を引き起こす場、これらの三つの場面はメンバーの自己肯定感や帰属意識などの心理状態に変化をもたらした。これらの場面はすべて他のメンバーとの共同創造の活動の中でのみ発生するものである。

「西諸弁標準語化計画」では地域方言「西諸弁」の特別さに注目している。しかし、方言だけが小林市の魅力ではなかった。「こばブットラボ」では高校生が小林市の自然環境に焦点を当てたことで、地域の特別な要素を発見し、独特な魅力を再認識した。小林市は霧島連山の北東部に位置し、中南部にはカルデラが陥没した小林盆地が形成されており、その北部が市の中心市街地となっている。この特別な地理構造のおかげで小林市には多様な植物が生育している。地元の人々にとっては見慣れた風景であるが、外で生活した経験があるリターンメンバーは外部の環境と比較することで、この自然景観の特別さに気づくことができる。活動の中で、彼らは自分たちの視点を共同創造を通じて高校生たちに伝え新たな刺激を与え、小林市の自然環境の独特さを再認識しあった。また、社会人は車で移動しているが高校生たちは電車を使って毎日通学している。このことから鉄道施設や小さな商店などに特別な要素が発見され、共有された。このように多様な視点から得られる物

語と写真は、メンバー同士の表現意欲を高め「地域の魅力を捉える習慣」を活性化させることがわかった。

以上のように、参加したメンバーの視点をとおしてふたつの「参加型地域広報」プロジェクトを分析し比較することで、プロセスの詳細と要因のいくつかが明らかになり、市民のシビックプライドの向上はその活動への参加過程と密接に関連していることを示すことができた。同時に「参加型地域広報」の可能性をも示すことができた結論する。

審 査 結 果 の 要 旨

1 論文の概要と講評

今日、「PR」と略される Public Relations は、戦後アメリカから導入された新しい概念であり、「広報」「広聴」などと和訳された。これらは行政機関の施策を展開するにあたっての国民との間で行われる「行政広報」として一般的に行われている。行政広報は行政側からの情報周知だけではなく、1970年代以降の「行政の民主化」、「市民社会」や「情報化社会」の進展、近年の「少子高齢社会」「自治体消滅危機」について対応する必要に迫られている。こうした背景の中、2009年の「地域主権改革」、2014年の「まち・人・しごと創生」によって加速され、地方自治体の行政広報は「地域発信時代」を迎えており、様々な取り組みが展開しつつある。そこに新しい種類の行政広報、「地域広報」が現れてきた。地域広報は地域の情報を提供するのみならず、市民の地域への関与を促す広報を意味する。また市民のシビックプライドを醸成する方策の一つとして期待されている。著者は、その中でもとくに市民の参加を得ながら制作する「参加型地域広報」、そのひとつである宮崎県小林市の事例に着目した。

本研究は、地域広報を市民参加で取り組むことによって参加者にどのような行動変化が現れるのかを観察し、市民のシビックプライド醸成に関わる要因を検証しようとするものである。著者は地域広報とシビックプライドの関係を考察するための基礎として、行政広報の歴史的進化、市民参加の多様な形態、参加型デザインおよび市民参加の尺度や指標に関する先行研究をレビューし、シビックプライドとは「市民自身がこの都市の一員でありここをより良い場所にするために積極的に関わっている意識」(伊藤香織 2019)と定義した。また参加型地域広報は参加型デザインに属すること、市民参加が組み込まれる活動は市民の自主性や自律性が重要とされていることなどに理解を深めた。一方、近年の行政広報の研究においては、広報物の制作プロセスに関する質的研究が不足していることが明らかになった。参加の重要性は強調されるが、具体的なデザインプロセスは研究されておらず、著者は参加者視点から見た研究が必要であると気づいた。

本研究の対象は、宮崎県小林市の参加型地域広報「西諸弁標準語化計画」と、著者が企

画した参加型社会実験「こばブットラボ」のふたつである。研究方法として、シビックプライド醸成のプロセスを人間の活動の変化の要因から明らかにできること、調査対象者が少数であっても人々の相互作用を分析できることなどから、質的調査研究方法の中でも修正版グランデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を採用している。分析結果が結果図として示されることや、プロセスをストーリーラインとして文章で表現することなどもこの方法の特徴であり、プロセスの記述に適していると判断した。

また著者は、宮崎県小林市を知るために歴史や地理、社会状況全般をリサーチした。後に、人口の流入は「西諸弁標準語化計画」の参加者の参加動機や、交通については「こばブットラボ」の高校生参加者が撮影した写真と物語に、それぞれ関係が深いことを読み取った。

研究対象の「西諸弁標準語化計画」とは、市民協働のまちづくりをテーマにする小林市の「てなんど小林」プロジェクトのひとつである。市民参加ワークショップにより計画され、職員を含む9名の市民が中心となってスタートした。市民が提供する写真と方言エピソードを組み合わせてポスターをつくる独自のシティプロモーション活動であり、地域固有の魅力を発信して広範な支持を集め約8年間継続した。著者はその間に制作された152種類のポスターすべてをタイプ別に分類し、事前インタビューと分析焦点者の選定などに活かした。そして「西諸弁標準語化計画」において、地域広報に関与することで参加者のシビックプライドがどのように醸成されるのかをM-GTAを用いて分析した。6名の分析焦点者の職業は様々で、はじめは「現在の地域に対するネガティブな印象」があった。しかし同時に「昔の地域に対するポジティブな印象」もあった。多くはUターンしてきた子育て世代であり、「次世代のための地域貢献意欲」持っていたことが分かった。彼らは「自由で積極的な活動状態」を続け、様々な失敗を経て「地域の魅力の発見」に至る。即ち方言をテーマすることにしたが、それは意外にも「好意的な反響」を得たのである。自分たちのやり方で評価を得たことで「自己肯定」感と意欲が高まり、次々と「地域のための持続的な自己行動」をおこしていた。著者は分析から得られた概念、カテゴリー、ストーリーラインから行動変化のプロセスをこのように分析し、「市民自身がこの都市の一員でありここをより良い場所にするために積極的に関わっている意識」が参加者に芽生え、シビックプライドを醸成することに近づいているのではないかと推測した。しかし、この調査では共同創作活動の部分が曖昧であり、それを詳細に知りたいと考えた。

そこでこの結果をもとに、著者は参加型地域広報の社会実験の場として「こばブットラボ」を企画したのである。フィールドワークで出会った宮崎県立小林秀峰高等学校の全面的な協力を得て2023年7月～8月実施された。この企画は高校生と社会人を対象にしている。異なる世代の参加、水平的な対話を促すための世代混成6人一組のグループ作業、身近で簡便な写真とエピソードをメディアにした表現活動、を条件とした。実験後M-GTAを用いて参加者の行動の変化を分析し、以下のことが明らかになった。分析焦点者たちは最初の段階ではこの実験について関心が低かったが、活動を通してメンバーとの対話が活性化し、「メンバーからの評価による地域への帰属意識の芽生え」「メンバーか

らの示唆による地域の魅力の多様性発見」「メンバーとの葛藤による地域理解不足の認識」などの心理的变化があった。このことから著者は「こぼブットラボ」は「誇りを育てる共同創造の場」であると意味づけた。共同創造からは「表現する力の価値を意識」と「表現による解釈の深化」という表現をめぐる独自の概念とカテゴリーが抽出された。また「こぼブットラボ」を終えた後も自発的に写真を撮影していることなどから、「地域の魅力を捉える習慣がついた」ことと「地域の魅力を解釈し表現する行為の持続化」が確認された。共同創作活動の詳細な観察からメンバー相互の影響や行動の変化の要因を言語化し、積極的かつ自主的な段階に表現を移行しようとする行動のプロセスを明らかにすることで、参加型地域広報の共同創造の場がシビックプライドの醸成に重要な役割を果たす可能性を論じることができた。

本研究は、小林市で行われた参加型地域広報の2つのプロジェクトの参加者の視点を通して、活動への参加プロセスと行動の変化の要因を分析し構造化することによって、その活動とシビックプライドの向上とが密接に関連していることを示した。都市デザインなどに比べると参加型地域広報の活動は新しい分野の参加型デザインであるが、その可能性を見いだすことができたといえる。今後は実際の地域広報としての展開に挑戦してほしい。付録Cに掲載する「こぼブットラボ」の作品は、すでに地域に固有の表現で満ち溢れている。期待したい。

2 博士学位申請論文公聴会と最終試験の概要

博士学位申請論文公聴会は、2024年8月8日(木)13:30より武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス504講義室にて対面とオンラインを併用し開催された。宮崎県立小林秀峰高等学校ローカルプロデュース部の生徒と教員がオンラインで参加した。提出物は、博士学位申請論文、ヒアリング資料一式、「こぼブットラボ」のワークシート資料一式、その他公表論文である。会場には「西諸弁標準語化計画ポスター分類」「西諸弁標準語化計画参加者のシビックプライド醸成のプロセス図ストーリーライン」「こぼブットラボ参加者のシビックプライドが向上するプロセスの結果図ストーリーライン」「こぼブットラボで制作された作品」などのパネルが展示された。著者によるスライド資料による論文要旨の発表と展示パネル等の説明、参加者からの質疑応答と指導教員による最終試験が行われ17:00に終了した。著者は公聴会に合わせて研究成果展「一緒に創ってわかる地域の魅力」を企画し、「こぼブットラボ」で制作されたすべての作品を市ヶ谷キャンパス1階MUJlcom内ギャラリーにて展示し、8月2日(金)～9日(金)まで公開した。

3 博士論文審査委員会の報告

指導教員、副指導教員からの最終試験質問と著者の回答概要は以下のとおり。この研究

による新しい発見は何か、また市民活動を対象に M-GTA を分析手法に用いた理由は何かに
 についての質問に対し、表現する行為を通して地域への理解が深まり表現による地域の魅
 力の解釈の深化を分析できたことが本研究独自の新しい発見と言えること、市民活動にお
 ける個々人の行動の変化の根拠や相互作用を結果図ストーリーラインを使って明確にした
 いと考え M-GTA を採用したことが説明された。社会参加とシビックプライドの関係は明
 らかにされたのかについては、参加をとおして自主的な社会行動が生まれ、これはシビッ
 クプライドの醸成と大いに関係していると考えていると解答した。「こばブットラボ」の
 市民参加レベルについての質問には、今回の実験はアーンスタインの参加の梯子の『パー
 トナーシップ』レベルであり、今後は市民や高校生が企画することを目標にしたいと答え
 た。参加を持続する仕組みとして「小林秀峰高等学校から高校の授業やローカルプロデュ
 ース部の部活動のプログラムにできないかという相談を受けている」ことが明かされ、今後
 の研究継続が具体的になった。

その後、502 講義室にて審査委員会による可否判定審議が行われた。予備論文の修正
 点について、研究動機の追加、参加型デザインの節の追加、市民参加の尺度の節の調整、
 参加型デザインに関する先行研究の追加などが確認された。その上で、市民参加における
 多様性とは子どもや老人など社会参画が困難な人たちを対象に据えることであり、「こば
 ブットラボ」の計画設計がこうしたことに着目していることが高く評価された。高校の授
 業やローカルプロデュース部の活動プログラムへの展開を支えるプラットフォームを提案
 することや、参加型地域広報とシビックプライドの関係をより鮮明にする継続的な研究に
 期待が寄せられた。今回はデザイナーという専門家の役割については言及できず、今後の
 課題として残されている。質的研究の観点からは、様々な分析手法を批判的に検証しなが
 ら著者独自の質的分析方法を見つけることも研究課題である。最後に、博士学位論文とし
 て十分であるという結論に至り、審査委員会全員一致で合格と判断された。

4 論文の目次

序論	…8
研究目的	
研究経緯	
本論文の構成	
第一章：研究背景	…15
1.1 参加型地域広報	
1.1.1 地域広報	
1.1.1.1 行政広報	

- 1.1.1.2 行政広報の歴史と定義の変化
 - 1.1.1.2.1 戦後、米国の概念を導入
 - 1.1.1.2.2 「情報社会」が出現
 - 1.1.1.2.3 「地域発信」の時代
- 1.1.1.3 「地域発信」時代における行政広報の新種類
- 1.1.2 市民参加
 - 1.1.2.1 市民参加の方法
 - 1.1.2.2 参加型デザイン
 - 1.1.2.3 市民参加の尺度
- 1.1.3 参加型地域広報の定義
- 1.2 シビックプライド
 - 1.2.1 シビックプライドの醸成
 - 1.2.2 シビックプライドの指標
- 1.3 先行研究
 - 1.3.1 行政広報に関する先行研究注
 - 1.3.2 参加型デザインに関する先行研究
- 1.4 参加型地域広報の先行事例
 - 1.4.1 調査方法
 - 1.4.2 生駒市の「いこまち宣伝部」
 - 1.4.2.1 生駒市について
 - 1.4.2.2 「いこまち宣伝部」について
 - 1.4.3 尼崎市の「尼崎市ブランドブック」
 - 1.4.3.1 尼崎市について
 - 1.4.3.2 「尼崎市ブランドブック」について
 - 1.4.4 考察
 - 1.4.4.1 写真を中心にする形式
 - 1.4.4.2 長期運営
 - 1.4.4.3 内的な効果
- 1.5 小括

第二章：本研究における調査方法

…47

- 2.1 調査対象の選定
- 2.2 調査に用いた分析方法
 - 2.2.1 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチについて
 - 2.2.2 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの採用理由

2.3 小括

第三章：宮崎県小林市の社会背景

…52

3.1 地理

3.2 人口

3.3 経済・産業

3.4 教育

3.5 観光

3.6 動物

3.7 植物

3.8 医療・福祉

3.9 交通

3.10 市民活動の現状

3.11 広報物現状

3.12 歴史

3.13 小括

第四章：「西諸弁標準語化計画」

参加者のシビックプライドを醸成するプロセスの考察

…76

4.1 研究対象・小林市の「西諸弁標準語化計画」

4.1.1 「てなんど小林プロジェクト」の背景

4.1.2 事前調査「西諸弁標準語化計画」の取り組みのプロセス

4.2 研究概要

4.2.1 分析テーマと分析焦点者の設定

4.2.2 倫理的配慮

4.2.3 分析手順

4.2.3.1 取材内容より具体例の抽出

4.2.3.2 分析ワークシートの作成と概念生成

4.2.3.3 各概念をカテゴリーとコアカテゴリーとして収束、結果図及びストーリーラインの作成

4.3 結果

4.3.1 結果図とストーリーライン「西諸弁標準語化計画」参加者のシビックプライドを醸成するプロセス

4.3.2 抽出された概念、カテゴリー、コアカテゴリー

- 4.3.2.1 コカカテゴリー 【次世代のための活動意欲の芽生え】
 - 4.3.2.1.1 カテゴリー「現在の地域に対するネガティブな印象」
 - 4.3.2.1.2 カテゴリー「昔の地域に対するポジティブな印象」
 - 4.3.2.1.3 カテゴリー「次世代のための地域貢献意欲」
- 4.3.2.2 コアカテゴリー 【共同活動を通じた地域の魅力の新発見】
 - 4.3.2.2.1 カテゴリー「自由で積極的な活動状態」
 - 4.3.2.2.2 カテゴリー「失敗経験」
 - 4.3.2.2.3 カテゴリー「異なる背景によって生じる新しい可能性」
 - 4.3.2.2.4 カテゴリー「地域の魅力の発見」
- 4.3.2.3 コアカテゴリー 【外部評価による自己肯定】
 - 4.3.2.3.1 カテゴリー「好意的な反響」
 - 4.3.2.3.2 カテゴリー「自己肯定」
- 4.3.2.4 コアカテゴリー 【地域のための持続的な自己行動】
 - 4.3.2.4.1 カテゴリー「新発見した地域の魅力の積極的な取り組み」
 - 4.3.2.4.2 カテゴリー「持続的な活動状態」
- 4.4 考察
 - 4.4.1 次世代に対する貢献
 - 4.4.2 地域の魅力の発見と判断
 - 4.4.3 「自己肯定」による持続的な自己行動
- 4.5 小括

第五章：社会実験「こばプットラボ」

参加者のシビックプライドが向上するプロセスの考察

…100

5.1 社会実験「こばプットラボ」

- 5.1.1 社会実験の企画
- 5.1.2 倫理的配慮
- 5.1.3 「こばプットラボ」とは
- 5.1.4 進行フロー
- 5.1.5 説明会
- 5.1.6 写真&物語ラボ1
- 5.1.7 写真&物語ラボ2

5.2 分析手順

- 5.2.1 分析テーマと分析焦点者の設定
- 5.2.2 分析焦点者の選定
 - 5.2.2.1 シビックプライド向上を測定するアンケート調査

- 5.2.2.2 シビックプライド向上を測定するアンケート調査の結果
- 5.2.3 取材内容より具体例の抽出
- 5.2.4 分析ワークシートの作成と概念生成
- 5.2.5 各概念をカテゴリーとコアカテゴリーとして収束
- 5.3 結果
 - 5.3.1 結果図とストーリーライン「こばプットラボ」参加者のシビックプライドを向上させるプロセス
 - 5.3.2 抽出された概念、カテゴリー、コアカテゴリー
 - 5.3.2.1 カテゴリー《初参加の無関心》
 - 5.3.2.2 カテゴリー《メンバーとの対話》
 - 5.3.2.3 コアカテゴリー【メンバーからの示唆による地域の魅力の多様性発見】
 - 5.3.2.3.1 カテゴリー《メンバーからの新情報》
 - 5.3.2.3.2 カテゴリー《地域に対する新しい理解》
 - 5.3.2.4 コアカテゴリー【メンバーとの葛藤による地域理解不足の認識】
 - 5.3.2.4.1 カテゴリー《自信の欠如》
 - 5.3.2.4.2 カテゴリー《メンバーとの葛藤》
 - 5.3.2.4.3 カテゴリー《知識不足の自覚》
 - 5.3.2.5 コアカテゴリー【メンバーからの評価による地域への帰属意欲の芽生え】
 - 5.3.2.5.1 カテゴリー《メンバーからの好評》
 - 5.3.2.5.2 カテゴリー《共感の喚起》
 - 5.3.2.5.3 カテゴリー《愛着の肯定》
 - 5.3.2.6 カテゴリー《表現による解釈の深化》
 - 5.3.2.7 コアカテゴリー【地域の魅力を解釈し表現する行為の持続化】
 - 5.3.2.7.1 カテゴリー《意欲的に地域の魅力を表現する行動》
 - 5.3.2.7.2 カテゴリー《行為の習慣化の可能性》
- 5.4 考察
 - 5.4.1 行動の変化によるシビックプライド向上の可能性
 - 5.4.2 他メンバーとの共感
 - 5.4.3 地域理解が足りないことの認識
 - 5.4.4 地域の魅力を表現する能力に対する理解
 - 5.4.5 誇りを育てる共同創造の場
- 5.5 小括

第六章：総合的な考察

…151

6.1 内部評価と外部評価がもたらす効果

6.2 表現力による自発的な行動の違い	
6.3 異なる背景を持つメンバーが発見した地域の魅力	
6.4 長期活動の効果	
6.5 共同創造におけるシビックプライドが高まる場面	
6.6 小括	
第七章：結論	…159
7.1 本研究の結論	
7.2 各章の要約	
7.3 本研究の意義	
7.3.1 学術的意義	
7.3.2 社会的意義	
7.3.3 個人的意義	
7.4 今後の課題と展望	
引用文献	…169
付録：	
付録 A, 「西諸弁標準語化計画」の作品	…181
付録 B, 「てなんど年表」と「てなんど年表展」	…189
付録 C, 「こばブットラボ」の作品	…192
謝辞	…231